The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	スピノザ『エチカ』における個物の定位 : その本質と現実存在について
Author(s)	藤野, 幸彦
Citation	メタフュシカ. 2012, 43, p. 39-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26489
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

スピノザ『エチカ』における個物の定位
──その本質と現実存在について──

藤野幸彦

序 ── 実体一元論における個物の地位 ──

「神を除いてはいかなる実体も存在しえず、また考えられることができない」（E1P14[1]）。「実体一元論 substance monism[2]」とも呼ばれるスピノザ哲学の、中核を為すテーゼの一つである。

勿論、スピノザが言う神とは、定義が示すとおり「各々が永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性から成る実体」（E1Def6）であり、「必然的に存在する」（E1P11）と言われるものである。加えて、冒頭のように神の他に実体が存在しないと言われるとすれば、「すべて在るものは神のうちに在り、また神なしには何物も在りえずまた考えられない」（E1P15）という主張が当然の帰結として生ずることにもなろう。「諸々の特殊的な事物 res particularis[3]は神の属性の変状、あるいは神の属性を一定の仕方で表現する様態に他ならない」（E1P25C）ともスピノザは述べていた。

ここでも彼の定義に従うならば、様態とは「実体の変状、即ち他のもののうちに在りかつ他のものによって考えられるもの」（E1Def5）となる。つまりスピノザは神という唯一実体における一種の状態として個物を規定していることになるが、ここには次のような問いが予想されるだろう。即ち人間の身体を始めとした、一般に物体と我々が呼ぶところのもの──実体としての身分を剥奪されたこれら個物をなお各自の個体性を有する「個物」として措定し得るのだとすれば、それは如何にして可能なのか、という問いである。言い換えれば、個物がここに在る、という事態をスピノザは如何なる仕方で理解しているのか。これを明らかにすることが本稿の課題である。

---

1 以下、本稿においてはテキストの参照箇所を次のように示す。E…『エチカ』、定理…P、証明…D、備考…S、系…C、定義…Def、補助定理…L。また、アラビア数字は『エチカ』の部や定理の番号を表わすものである。なお本稿は『エチカ』本文の引用に際して畠中尚志氏の邦訳を主に参照し、必要に応じ手を加えている。

2 例えば、A. Schmidt や J. Miller がこうした呼称を用いている。

3 本稿が参照した畠中氏による邦訳では、res particularis と res singularis は共に「個物」と訳されているが、本稿はこれを特殊的事物・個別的事物として区別する。この区別は朝倉氏によるものを踏襲しているが、その意味するところは以下の議論を参照されたい。また、本稿が単に「個物」と言及する際には個々の事物一般というほどの意味で用いている。

この問いに答えるために、本稿はスピノザが現実存在を二つの相のもとに捉えようとしていたことを確認することから始めたい。その二通りの仕方を本稿は持続の相、永遠の相とそれぞれ呼ぶことになる――前者は一定の時間と場所とに関係づけられて存在すると考える仕方であり、また後者は神の本性の必然性から生じ存在すると考える仕方であった。これら二つの相における個物の地位を吟味することを通じてスピノザの個物理解を見ていきたい。

持続の相における現実存在を考察するにあたっては、スピノザが提示する本質と存在に関する議論、またその個体論へと参照する。そして実体の直接無限様態であるところの運動と静止において成立する運動と静止の割合――これは延長実体において生じる一定の状態と言ってよい――これにより個物の現実的本質と現実存在が担保されることを本稿は確認するだろう。

しかし、これにより確保される現実存在とはあくまで持続の相におけるそれに過ぎず、従って本稿は永遠の相における個物の定位を続けて論じていくことになる。結論から言えば、永遠の相において個物をその個別性のままに認識すること――その可能性を本稿は否定し、事実、そうした認識はスピノザの体系に見出されえないことを見ていくことになる。

では現実存在しない事物とは、個別的に認識されることがない以上、やはり個別的な存在を有するとは言えないのだろうか。本稿が最後に主張するのは、たとえそうだとしても『エチカ』において個物の個別性が失われることはない、ということである。如何なる知性によっても個別的に認識できないということが、直ちに個物の個別性を奪うわけではない。このことを最後に主張したい。

以上が、本稿の試みである。なお本稿の目的には『エチカ』全域を理解するための基礎の一つとして、その個体論を提供することが意図として含まれている。

1．存在の二つの相 ―― 永遠と持続 ――

議論を始めるに当たって、まずは個別的事物の定義を確認しておこう。「個別的な事物 res singularis とは有限なものであり、また決定された現実存在を有するものと解する。もし多数の個体が、その全てが同時に一つの結果の原因であるようにある活動において協同するならば、私はその限りにおいてその全てを一つの個別的な事物と見なす。」（E2Def7）とスピノザは明らかに述べていた。またここで、定義される個別的な事物と上に見た『エチカ』第一部定理 25・系で神の様態と言われていた特殊的な事物 res particularis との関係を見ておきたい。

『エチカ』の論証を見る限り、これら二つの事物概念は共に様態として規定されており、その外延は一致すると思われる――訳出に際してこれらの語が特に区別されてこなかったという事実も、こうした事情を鑑みれば頷けるものがあろう[4]。しかし実際に語の区別を設けられていることもまた確かであり、例えば朝倉氏はここに次のようなスピノザの意図を見出している。その指摘によれば特殊的な事物とは様態一般のある具体例というほどの意味に過ぎないが、対して個別的

[4] これには res particularis という語の用例が『エチカ』を通じても 2 例に留まり（個別的なものという意味で用いられる particulares を含めても 3 例に留まる）res singularis に比して極端に少ないという事情もあることが推察される。

な事物は他の事物との関係の中で初めて与えられるというのである[5]。「あらゆる個別的なものsingulare、即ち有限であり、決定された現実存在を有するあらゆる事物は、同様に有限であり、決定された現実存在を有する他の原因によって現実存在するように、また作用するように決定されない限り現実存在することができず、また作用するように決定されることもできない」（E1P28）とされるように、個別的事物は常に他の個別的な事物との関係において捉えられるのでなければならない。

この指摘にならうならば、『エチカ』において諸々の事物が二通りの仕方で記述されていることを確認することができるだろう。一つは様態の一例、特殊的事物としての記述であり、この時には「神なしには在ることも考えられることもできない」という存在論的な依存関係が強調される。他方で、個別的な事物として記述されるに際しては他の事物の作用という側面が強調されるのである。さしあたりこれら二つの側面の前者を存在論的構造、また後者を力学的関係と呼ぶことにしておこう。

ここで指摘した二つの側面は、実際に『エチカ』第二部定理 8 とその系で論じられる内容に対応するように思われる。確認しておこう。

「存在していない non existens 個別的事物ないし様態の観念は、個別的事物ないし様態の形相的本質が神の属性の中に含まれているのと同じように神の無限な観念の中に包容されていなければならない」

（E2P8）

「個別的な事物がただ神の属性の中に包容されている限りにおいてのみ存在する間は…個別的な事物の観念は神の無限な観念が存在する限りにおいてのみ存在する。しかし個別的な事物が神の属性の中に包容されている限りにおいて存在するばかりではなく、さらに時間的に持続すると言われる限りにおいてもまた存在すると言われるようになると、個別的事物の観念もまた持続すると言われる存在を含むようになる[6]」

（E2P8C）

定理 8 で言われる「存在していない個別的事物 res singularis non existens」とは、続く系を見れば、より正確には「神の属性の中に包容されている限りにおいてのみ存在する個別的事物」であると分かる。また、「さらに時間的に持続すると言われる限りにおいても存在する」という表現に注意しよう。つまりスピノザは神の属性に包容されている限りの存在が、これに加えて時間的に持続する存在をも含む、というふうに存在 existens に関する二つの相をやはり扱っているのである。

またこのように存在を二相的に捉える仕方は「永遠の相のもとで sub specie aeternitatis」事物を

5　朝倉、pp.153-157。

6　本稿では existere、及びその関連語を「存在する」あるいは「存在」と訳出している。これはスピノザが actu existens と呼ぶものを特に「現実存在」として区別するためである。恐らく厳密には existens は「現実存在」と訳されるべきであり、またスピノザはこの現実存在を現実的なもの actus とそうでないものに分けているのではあるが、訳語の煩雑さを避けるためにこのようにした。

認識する、と言われるスピノザの直観知の理論を下支えする議論ともなっていた。『エチカ』第五部定理 29・備考においてスピノザは以下のように述べている。

「即ち、それが一定の時間と場所という観点において存在するという限りにおいて現実的であるか、あるいは神に含まれ、神の本性の必然性から生じると我々が考える限りにおいて現実的であるか、の二つの仕方である。ところでこの第二の仕方で真のもの、あるいは実在的なものとして考えられた事物を我々は永遠の相のもとで考えているのであり、またその観念は第二部定理 45 で示したように神の永遠・無限の本質を含んでいる」

（E5P29S）

事物が神に含まれ、また神の本性の必然性から生じる――これが示すものは、即ち実体／様態関係において捉えられた存在論的構造、その中で位置づけられた個物の在り方である。また一定の時間と場所において存在するという他方の在り方は個物の持続的な存在、先述の力学的関係において見られた個物の在り方を指すと見て良いだろう。

このように我々は、『エチカ』において個物が扱われる二つの視座、存在論的構造という観点と力学的関係という観点が個物の存在の二相に対応することを見ることができる。先に進む前に整理しておこう――スピノザは個物を二つの相において捉えている。一つは、存在論的な構造の内において、永遠の相のもとに。一つは、力学的関係の内において、持続の相のもとに。そしてもう一つ。存在論的な構造のもとで神の属性の内に含まれる限りにおいて存在していたものが、持続の相においても存在するようになる――このようにスピノザが、現実的存在を二重の仕方で捉えていたということ。持続し始めたからと言って、個物が神の属性に含まれなくなるなどといったことはないことに注意しておこう。

２．本質の二つの相 ――「神の属性に含まれる限りの」本質と「現実における」本質 ――

我々は上に、個物の存在が二つの相において捉えられていることを確認した。では、こうした個物の個別性とは如何にして規定され得るのか。これを扱うために、本節では『エチカ』で語られる本質概念を検討していきたい。スピノザ自身の定義は以下のようになっている。

「それが与えられればある物が必然的に定立され、それが除去されればそのある物が必然的に滅びるようなもの、あるいはそれがなければある物が、また逆にそのある物がなければそれが、在ることも考えられることもできないようなもの、そうしたものをその物の本質に属すると私は言う。」

（E2Def2）

差し当たりこの定義からは、事物とその本質とが相即不離の関係にある、と言うことができるだろう。ここで言われている事物の本質に属するもの、とは具体的には何であるのか―この問いに答えることが当面の課題である。しかしその前に、ここでは『エチカ』において本質の存在が事物の存在と同様、二つの相において捉えられていることを確認したい。もう一度『エチカ』第二部定理 8 を見てみよう。

「存在していない個別的事物ないし様態の観念は、個別的事物ないし様態の形相的本質が神の属性の中に含まれているのと同じように神の無限な観念の中に包容されていなければならない」（E2P8）

存在していない、というこれは、厳密には神の属性の中に包容されている限りにおいてのみ存在する、というほどの意であることは既に見た。個別的事物の形相的本質は神の属性の中に含まれ存在する――またこの在り方は続く系において、個別的事物が神の属性の中に包容されている限りにおいてのみ存在する在り方と等置される。個物の本質が個物と同様、存在論的構造の中で捉えられており、また個物の本質の存在が当の個物の存在に等しいものとして扱われていることが分かるだろう[7]。

続いて、スピノザが現実的本質と呼ぶものについて語っている箇所を確認しよう。以下に挙げるのは、『エチカ』の主要概念の一つであるコナトゥスに関わる定理である。

「おのおのの事物が自己の有に固執しようと努める努力（コナトゥス）はその事物の現実的本質[8]にほかならない」（E3P7）

事物の現実的本質はこの定理の証明において「事物が単独で、または他の事物と共にあることを為し、あるいはまた為そうとする努力」（E3P7D）と言い換えられ、さらに続く定理 8 では「無限定の時間を含む」と言われる。ならばこの現実的本質とは前述の力学的関係において、また持続の相において捉えられた本質の在り方だと見てよいだろう[9]。そしてここでも個物の現実的本質は当の個物が有する活動、つまり持続の相における個物の現実存在に等置されることが分かる[10]。

個物の本質が個物と同様に二つの相において捉えられるのみではなく、個物の存在に等置される――恐らくはこれこそが、個物とその本質が相即不離の関係にある、ということの謂なのであろう。即ち、これら二つの相において見られた諸個物の存在と、その本質の存在とは事柄として等しい。神の属性に含まれる限りで存在する個物とその本質、加えて持続していると言われる存在をも含む個物とその本質――これらは、存在においてはもはや区別されないような仕方でぴたりと重なっているのである[11]。

---

7 個物の存在と個物の本質の存在が等しい、というこの表現は、個物の本質存在と現実存在が等しい、という主張として解されてはならない。区別されないのはあくまで両者の「同じ層における」現実存在である。

8 現実的本質 essentia actualis と言われるこの現実性は、『エチカ』第五部定理 29・備考に見たような二通りの仕方で考えられる現実性とは異なる意味で用いられている。『エチカ』第二部定理 9 で現実に現実存在する actu existens 個別的事物が語られる際、この語は持続の相における個物を表し、神の属性に含まれる限りの個物と対比されていた。従ってこの語はむしろ現実態における本質、持続における本質という意味合いを持つものとしてここでは理解されるべきである。

9 もちろん、この現実的本質もまた力学的関係と存在論的構造という二重の仕方で理解されるべきものである。特に個物が自己の有に固執する、という主張は存在論的構造の基礎づけなしには理解され難いものとなろう。『エチカ』第三部定理 6 を参照。

10 個物の活動を現実存在と等置するこの図式については、続く節における論証をさらに参照されたい。

11 ドゥルーズはこれを表現して、事物と本質との区別は実在的なそれではないと述べている。
Deleuze（1986）13 章、また Deleuze（1981）4 章 Existence の項を参照。

３．現実的本質に属するもの ―― スピノザ個体論における運動と静止 ――

本稿はここまでに、『エチカ』において個物とその本質が捉えられる仕方がそれぞれ二つあること、そしてこれらが永遠の相、持続の相という二つの相に対応しており、またそれらの相において諸個物の存在がその本質の存在に重ねられた仕方で理解されることを確認してきた。では改めて、これら個物の本質とはどのような仕方で理解されるだろうか。『エチカ』第二部定理 13・備考に続く補助定理群の中でスピノザは諸物体の本性について幾つかの注意を与えており、その中にある個体の定義はこれを検討する上で重要な意味を持つように思われる。

「同じあるいは異なった大きさのいくつかの物体が、他の諸物体から圧力を受けて、相互に接合するようにされている時、あるいは…自己の運動をある一定の割合で相互に伝達するようにされている時、我々はそれらの物体が互いに合一していると言い、またすべてが一緒になって一物体あるいは一個体を組織していると言う。そしてこの物体あるいは個体は、構成諸物体のこうした合一によって他の諸物体と区別される。」

（E2P13S,Def）

延長属性における個体とは、この定義によれば自身を構成する諸物体が一定の割合で運動を相互伝達することによって他と区別されるような、そうした様態であることになる。そしてこの定義は人間身体の形相 forma について論じる際に援用されるものでもあった。forma という語はスピノザにおいて形状、また形態という意味で用いられる語でもあるが、ここでは本性、本質などに関連付けられていることを先に断っておく。

「人間身体の形相を構成するものは、身体の諸部分がその運動をある一定の割合で相互に伝達しあうことに存する。」

（E4P39）

「ここで注意しなければならないのは、身体はその諸部分が相互に運動および静止の異なった割合を取るような状態に置かれる場合には死んだものとして私が理解していることである。つまり、血液の循環その他身体が生きているとされる諸特徴が持続されている場合でも、なお人間身体がその本性とまったく異なる他の本性に変化しうることが不可能ではないと私は信ずるのである。」

（E4P39S）

諸部分の運動と静止の割合が変化すると、身体の本性は変化し死んだものと見なされる。スピノザはここで身体の同一性に関する問題を取り上げており、またそこでは運動と静止が伝えられる割合こそが、当の同一性を担保するものとして指定されているのである。

個物が持続の相のもとで現実に存在すると言われるためには、その個物に固有の運動と静止の割合が成立している必要があり、個物はこの運動と静止の割合から無関係に考えられることはできない。

また逆に、この個物と無関係にその運動と静止の割合が成立すること、考えられることもやはりできないだろう。ならば『エチカ』第四部定理 39 におけるこの一節は、個物に固有の運動と静止の割合がまさに当の個物の本質に属すると述べているのではないか。即ち延長属性における個物の本質は、「その諸部分において運動と静止が伝達される際の、個物に固有の割合」として理解されることになる。

この運動と静止の割合は、個物が持続の相において現実存在する限りは、常にそこに成立していると言われねばならず、そして成立するのはその当の個物の現実存在、その諸々の作用の中においての他にない。「おのおのの事物が自己の有に固執しようと努める努力はその事物の現実的本質にほかならない」（E3P7）という定理を我々は既に見た。現実的本質とは、持続的な現実存在において現に成立しているところの運動と静止の割合なのである。

また他方この運動と静止の割合、即ち個物の現実存在を、持続における現実的な成立とは別に考えることは可能であろう。それは存在論的に神に依存するものとして個物を捉える仕方であり、自身に固有な運動と静止の割合をそれ自体[12] として、持続から切り離して捉えられた個物の在り方――これが永遠の相のもとに見られた、神の属性に含まれる限りの個物の本質に対応する。このような構図を我々は描くことが出来る[13]。

さて、スピノザはシュラー宛の書簡において、運動と静止を延長属性における直接無限様態として提示していた[14]。そして個体を構成する最小の要素として、運動と静止によってのみ相互に

---

12 ただし、本稿が後に述べるようにこの割合それ自体は如何なる認識の対象にもならず、ただ神の属性の内に含まれて存在すると言い得るのみである。その意味では永遠の相のもとに見られた事物の本質は「持続の相において運動と静止の一定の割合として表出されているところのもの」と呼ばれる方が自然であるかも知れない。しかし神の属性に含まれる限りの存在が持続においても存在するようになる、というスピノザの論旨を見るに、神の属性に含まれているそれと同じものが現実的な仕方でも存在するようになる、と言うべきであろうから、本稿ではこれを「割合それ自体」と呼ぶことにしたい。

13 こうした主張は、様態の本質をその構成要素の運動と静止の一定の関係によって規定するというドゥルーズの立場に連なる。ただしこの本質が神の知性の内で認識される、というドゥルーズの主張については、本稿はこれに与しない。Deleuze（1968）12 章を参照。

14 書簡六四。

なおゲルーは直接無限様態を永遠の本質によって構成される総体と解しており、運動と静止を直接無限様態とするスピノザの不備を指摘している。彼によれば運動と静止は現実存在において事物の永遠的本質の内的な特徴を示すのであって、この運動と静止によって示される永遠的本質が延長属性における直接無限様態を構成する、とすることで思惟属性との対応が保たれ、またスピノザの体系の基本的構造が保たれるという。

スピノザがその死のために自身の自然学を纏める機会を得なかったことはチルンハウス宛書簡から伺えるが、ゲルーは自身が指摘する不備をこうした事情に帰し、補足を行っているのである。

しかし本稿は、スピノザにはそうした不備はないと主張する。ゲルーの指摘は直接無限様態が永遠的本質の領域である、という彼自身の解釈に基づくものであり、この点に本稿は同意しないためである。

直接無限様態を永遠的本質の領域と見なすゲルーの解釈は、本稿も参照する『エチカ』第二部定理 8・系にある「（神の属性に包容される限りの）個物の観念は神の無限な観念が存在する限りにおいてのみ存在する」という一節の理解に拠っている。彼はこの神の無限な観念を神の無限知性（これが思惟属性における直接無限様態に相当することは本稿も同意する）と置き換え、存在しない個物の観念、即ちそうした事物の本質の観念が神の無限知性に含まれると読む。この「包容する」という関係は部分と全体の関係として理解されており、そのため直接無限様態が永遠的本質の総体と見なされるに至るのである。

本稿はこれに対し、直接無限様態と永遠的本質の関係を、部分と全体の関係としては理解しない。神の無限な観念に永遠的な本質が含まれる、という事柄は神の属性の内に含まれる、という事柄と同様に解されるべきであり、従ってこれは本稿が先に指摘した存在論的な依存関係と見られるべきであろう。

産出される各々の事物（この中には本質も含まれる）は直接無限様態なくしては産出されることが出来ない。延長属性における個物の本質を運動と静止の割合と解するならば、この割合（現実的本質）の成立は直接無限様態からの個物の産出と同じ事柄を意味する。これと同様に、思惟属性における現実的本質は思惟の直接無限様態から産出されるのであって、この意味で事物の本質は直接無限様態に含まれるのである。

このように見ると、直接無限様態である運動と静止が現実存在において永遠的本質を示す、というゲルーの主張は彼の意図とは別の形で本稿に合致することになろう。直接無限様態はそれ自身として持続する様態ではあるが、しかし間接無限様態において事物とその本質を産出する、ということによって事物と本質を包容するのであり、またこの産出によって事物の永遠的本質を表出しているのである。

本稿の批判は、ゲルーと同様に個物の本質を直接無限様態の部分として理解するドゥルーズに対しても当てはまるものであろう。Gueroult (1968) pp.316-325, Gueroult (1974) pp.92-102, Deleuze (1981) 4 章 Mode の項を参照。

区別される物体、最単純物体と呼ばれるものをスピノザは別に提示している。

「これまでに我々は単に運動および静止、迅速および遅緩によって相互に区別される諸物体からのみ組織されている個体、言いかえれば最も単純な諸物体からのみ組織されている個体を考えた。しかし今もし本性を異にする多くの個体から組織されている他の個体を考えるならば、そうした個体は他のいっそう多くの仕方で動かされ、かつそれにもかかわらずその本性を保ちうることを我々は見い出すであろう…さらに我々はこうした第二の種類の個体から組織された第三の種類の個体を考えるなら、また我々はそうした個体がその形相を少しも変えることなしに他の多くの仕方で動かされうることを見い出すであろう」

（E2P13S,L7S）

直接無限様態であるところの運動と静止は、延長属性における神の絶対的な本性から永遠かつ無限に生じる。そしてこの運動と静止において見出される最単純物体が一定の割合で運動を伝え合う時、その事態はまさにその割合によって本質を規定された個物が現実に存在している、ということに等しい。

してみるとある個物が存在し、そしてその個物が運動する。こうした構図はスピノザにおいて本来的でないことになろう。勿論、個物が運動を有すると言われはする。しかしその根本において先立つのは直接無限様態としての運動と静止であり、この運動と静止によってその本質を理解されるものとして、持続の相における個物の存在は捉えられているのである。

スピノザ的な実体一元論において様態と見なされるところの諸個物は、如何にしてその独自の個別性を有するところの「個物」として理解され得るか――どうやら、この第一の問いに答えるべき地点に我々は到達したようである。直接無限様態である運動と静止において成立する一定の割合、これこそがその割合が本質に属するところの個物の個別性、持続の相における現実存在を担保するものであり、個物の現実的本質と呼ばれるものに他ならない。即ち、自身に固有の運動と静止の割合が存続する限り、個物は現実存在するものとして捉えられるのである[15]。

４．個別的なものとしての本質 ―― 種的本質の否定として ――

このように我々は延長属性における個物の現実的本質を、運動と静止という観点から確認することが出来た。しかしこれは、スピノザが個物の現実存在を捉える仕方の一つに過ぎない――ここで言う現実的本質、即ち現実存在をもう一方の仕方で、即ち永遠の相のもとに捉える、とはどういうことか。これを考えてみたい。本稿は先に、運動と静止の割合それ自体が神に存在論的に依存するものとして、その属性の内に含まれると述べた。それは、神の属性の内に含まれる事物の形相的本質に相当するはずのものである。これを考察することで、本稿は永遠の相における個物の定位を試みたい。

---

[15] 本稿の主張は、ここでもドゥルーズのそれに接近する。Deleuze（1968）13 章、14 章を参照のこと。

ところで今、目の前に見える個物。この個物の本質に属し、そして現に成立しているはずの運動と静止の割合。これを例えば、彼此の諸部分の間に云々の割合で運動と静止が、と具体的に部分を特定し割合を知る――このようなことは可能だろうか。『エチカ』を参照してみたい。

「現実において存在する個別的事物の観念は、神が無限である限りにおいてではなく神が現実において存在する他の個物の観念に変状したと見られる限りにおいて神を原因とし、この観念もまた神が他の第三の観念に変状した限りにおいて神を原因としており、このようにして無限に進む。」

（E2P9）

「おのおのの観念の対象の中に起こるすべてのことは、神の中にその観念が存する（この部の定理 3 により）。しかしそれは神が無限なる限りにおいてではなく、神が他の個物の観念に変状したと見られる限りにおいてである（前定理により）。だが（この部の定理 7 により）観念の秩序および連結は事物の秩序および連結と同一である。故に個々の対象の中に起こる事柄についての認識は、神がまさにその対象の観念をもつ限りにおいてのみ神の中に在るであろう。」

（E2P9C,D）

持続において存在する事物について、その原因である限りの神の内にその認識があることは疑いない。また「神は事物の存在の起成原因であるばかりでなく、また事物の本質の起成原因でもある」（E1P25）と言われるように、スピノザは事物と同様にその本質も神により産出されると考えていた。持続の相において現れている本質――これは先に我々が現実的本質として理解したものであるが、これを認識することが我々には不可能だとしても、神の内にはその認識があると考えて良い。

しかし神の属性に含まれる限り、という本質についてはそうではない。繰り返し述べたようにこれは持続の相のもとに現実存在しておらず、従ってその観念もまた持続の相のもとにはない。永遠の相のもとにある個物の認識とは、持続において決して現実化しないのである。

では、こうした本質を明らかにするような、永遠の相における認識、などというものが神の属性の内に含まれて存在しているのだろうか。もう少しスピノザの議論を追って見よう。「事物をある永遠の相のもとに知覚することは理性の本性に属する」（E2P44C2）とスピノザは述べていた。また、その証明の中でスピノザは理性に関して説明を加えている。

「…理性の基礎は概念であって（この部の定理 38 により）、そうした概念はすべてのものに共通するものを説明し、そして（この部の定理 37 より）何ら個物の本質を説明しない。従ってそれらの概念は何ら時間との関係なしにある永遠の相のもとに考えられなければならぬ。」

（E44C2D）

理性の基礎となる概念とは、『エチカ』第二部・定理40備考で語られた共通概念に違いない。そしてこの共通概念を「我々の推論の基礎」とスピノザが呼ぶことを考えるならば、次のように結論することができる。理性知に関する限り、こうした仕方で我々が到達する認識はあくまで全ての事物に共通する事柄、一般的な事柄を抜け出ることはないということ。これは『エチカ』で展開される論証そのものもまた、個物の個別的な認識には到達することがないという事実を証言するものと言って良いだろう。

この事情は『エチカ』が直観知の議論へと進んだ後でも変わることはない。「現実に存在するおのおのの物体ないし個物の観念はすべて神の永遠・無限なる本質を必然的に含んでいる」（E2P45）とスピノザは述べており、これは共通概念として十全に認識されるに至る。即ち、「人間精神は神の永遠・無限なる本質の十全な認識を有する」（E2P47）のである。そしてスピノザはこの議論に続いて、理性知から直観知への移行を次のように説明していた。

「これによって神の無限なる本質ならびにその永遠性はすべての人に認識されることが分かる。ところで、ありとあらゆるものは神の中に在りかつ神によって考えられるのであるから、この結果として、我々はこの神の認識からきわめて多くの十全な認識を導き出し、このようにしてかの第三種の認識を形成しうる、ということになる。」

（E2P47S）

ここで行われる移行を理解するためには、我々が有する理性知とはあくまで我々自身が形成するものであることに注意せねばならない。我々は確かに共通概念を有し、そこから理性知を形成する。そしてこの理性知でもって我々は「神の無限なる本質ならびにその永遠性はすべての人に認識され」、「ありとあらゆるものが神の中に在りかつ神によって考えられる」ことを論証し、知るのである。これは我々が理性知を有し、そして理性知が真であるということが、取りも直さず神の本質の必然性に依存していることを当の理性自身が知る、という認識に他ならない。

理性知の基礎となっている全てのものに共通のもの、それは神の本質である――これを認識することで、我々の認識は直観知へと進む。ならば、我々は直観知が全てのものに共通な事柄に立脚しているという点で理性知と変わりないことに気付くだろう。つまり、理性知や直観知によって永遠の相のもとに事物が捉えられている時、その認識は全ての事物に共通する事柄、一般的な事柄を抜け出ることはないということ。これを我々は確認してきたのである。

これは我々の認識能力における不足の故に永遠の相のもとにある事物を認識できない、ということではない。スピノザは先に見たシュラー宛書簡の中で「絶対に無限なる知性」を思惟属性における直接無限様態として示していた。この直接無限様態とは確かに永遠かつ無限の様態として理解されるべきものではあるが（E1P21）、しかし「神のある属性の絶対的本性から生ずる」と言われる限り、これは様態として存在し、持続の相に属すると考えられねばならない。

ならば、本稿は次のように結論せねばならないだろう。持続の相において現実化した個物に関しては、個物の原因である限りの神の内にその認識がある。そして永遠の相において神に含まれ

る限りの個物に関しては、その本質の個別的認識は現実的知性に関する限り存在せず、また現実的知性を離れた個別的認識、などというものも存在しない。従って、そのような認識は端的にどこにもない。ただ、そうした本質の観念が個物の形相的本質と同様、神の属性に含まれて存在すると言われ得るのみなのである。

持続のもとに現実存在していない事物であっても、その形相的本質は神の属性に含まれて永遠の相のもとに存在する。スピノザは確かにこのように主張しているように思われるが、しかし同時にこうした形相的本質――これは持続の相において運動と静止により表現されるところのものである――が具体的にいかなるものであるかは原理的に明らかになることがない。このことを指摘して、柏葉氏は「匿名の本質」として個物の本質を提示している（実際に氏が論じるのは個物ではなく人間の本質ではあるが、事情は同じであろう）。それは「誰のものか見分けがつかない本質」であり、「誰にとっても当てはまりうる一般的なあるいは人間すべてに共通の本質でありうる」もの、また共通概念に基づいて理解されるものであるという[16]。だとすれば、ここで言われる本質は類において共通する種的本質であるということになろう。

氏によれば、個物の形相的本質にはそれが現実に存在する時にまとう筈の環境に依存した特性が欠落しており、持続の相において現実化されて初めて当の事物の本質であることが分かる。しかし、そのように現実化されていない限りは他の個物と共通する本質であり、当の個物の個別的本質となるのはまさにその個物が匿名の本質を我がものとしているという事実によるのだという[17]。

ここで問題になっているのは、まさに本稿が取り上げる個物の地位に他ならない。スピノザが個物の存在とその本質の存在を実在的に区別しないことを本稿は確認してきた――個物の形相的本質が個別性を持たないとすれば、個物は神の属性の中に含まれる限り個別的な存在を持たず、その個別性とは持続において初めて獲得されるということになる。

しかし、本質が匿名であるということは必ずしも個別性の消失を意味するわけではない。本稿の主張を再び取り上げよう。上に我々は、永遠の相のもとに見られた個物の本質を「当の個物が現実存在する限り成立するところの、個物の諸部分の間で運動と静止が伝達される固有の割合そのもの」である、と主張した。この割合は、確かに柏葉氏が主張するように当の個物が持続の相において現実存在する際に有するはずの特性を含んでいない。しかしそれでも、この割合は当の個物に固有のものでしかありえないのではないか。永遠の相のもとに見る限り、個物の本質は「誰のものか見分けがつかない」。しかしそれは「誰にでも当てはまりうる」こととイコールではない。

本稿のこの議論は、スピノザが普遍概念を扱った『エチカ』第二部定理 40・備考一に対応するように思われる。その主張は、人間・馬・犬といった普遍概念は諸々の事物が一致する点を示しているに過ぎないというものであった。

種的本質に相当するものを共通概念との関係で考察するならば、それは十全な認識に基づくものとして解釈されることになる。しかしこの共通概念も、事物における一致点を示している、と

16　柏葉、p.42。

17　同、pp.38-39。

いう点においては変わることがない。その意味で種的本質とはスピノザにおいて個別的本質の一致点を示すに過ぎないということになるだろう。

同じ種に属する各々の個物の本質、例えば各々の人間の本質の全てに共通する点がある、ということを本稿は否定しない。しかしこれはあくまで本質における共通点なのであって、共通する本質そのものがあるということをスピノザの議論から見出すことはできない。

先立つのはその種に属する全ての事物に共通する本質ではなく、個物の本質である。そして、これら個物の本質における一致点を表す際にスピノザは「人間の本質」というような種的本質を思わせる表現を用いていた。即ち、こうした表現はスピノザにとって非本来的な用法であって、その基となっている本来的な意味における本質とは、やはり個別的本質に他ならない。従って個物の形相的本質が神の属性に含まれて現実存在すると言われる時、あるいは永遠の相のもとで個物の本質が捉えられる時、そこに見出されるのは決して種的なそれではない。たとえ個別的認識が不可能となる対象であったとしても、各々の個物に固有の、まさに個別的と言われる本質が志向されていなければならないのである。

結 —— 個別的本質の定位 ——

本稿で論じられるべき事柄は、ここにほぼ尽きたと言ってよいだろう。結論を繰り返すならば、持続の相のもとに現実存在する個物とは直接無限様態である運動と静止において成立する一定の割合によりその本質が理解され、個別的なものとして定位される、そうしたものである。またこの個物は、自身に個有の割合として持続の相に現れる形相的な本質、これが神の属性に含まれるという仕方でも存在するものとして理解される。これが永遠の相のもとに事物が存在する、という事であった。

こうした永遠の相のもとに存在する本質が、その個別性において認識されることはない。しかしこの事実は、永遠の相において個物がその個別性を失うということを意味してはいなかった。本稿が続いて確認したのは、このような事柄である。相即不離、と本稿は個物と本質の関係を表現した——それは個物を離れて存在し得るような、種的本質の排除を意味しているのである。

「人間」または「様態」等、一般的なものとしてしか考えられない概念を用いて記述された『エチカ』が如何にして個別的な個物へと到達しうるのか。これは『エチカ』の解釈上避けられ得ぬ問題であり、また事実『エチカ』においては個物の個別的本質がその個物各々について具体的に語られている訳ではない。論証は、あくまで一般的な事柄のみを扱っている。しかしその一方、個物とその本質が徹頭徹尾、個別的なものとして捉えられようとしていること、これに我々は注意せねばならないだろう。『エチカ』において一般的な論証が成り立っているという事実は、そうした一般性の基となる個別的な事物の存在によって支えられている。少なくともスピノザは、『エチカ』の中でそうした体系を提示しようとしていたように思われるのである。

【文献一覧】

・B.d.Spinoza, *ETHICA ORDINE GEOMETRICO DEMONSTRATA*, 1677

—— , *EPISTOLAE*.

＊スピノザの著作についてはゲプハルト版を使用し、また以下の URL で公開されている電子テキストを参照している。 C. Gebhardt(ed), *SPINOZA OPERA*, Carl Winter, Heidelberg, 1925(http://bspinoza.co.cc/)

・Deleuze,G. *Spinoza et le problème de l'expression*, Paris: Éditions de Minuit, 1968.

邦訳：『スピノザと表現の問題』、法政大学出版局、1991 年。

—— , *Spinoza Philosophie pratique*, Paris: Éditions de Minuit, 1981.

邦訳：『スピノザ　実践の哲学』、鈴木雅大訳、平凡社、2002 年。

・Gueroult,M. *Spinoza I DIEU*, aublir,1968.

—— , *Spinoza. II L'ÂME*, aublir,1974.

・Miller,J. "Spinoza and the Stoics on Substance Monism", in Olli Koistinen(ed.), *The Cambridge Companion to Spinoza's Ethics*, Cambridge University Press, 2009.

・Schmidt,A. "Substance Monism and Identity Theory in Spinoza", in Olli Koistinen(ed.), *The Cambridge Companion to Spinoza's Ethics,* Cambridge University Press, 2009.

・朝倉友海、『概念と個別性 スピノザ哲学研究』、東信堂、2012 年。

・柏葉武秀、「スピノザにおける精神の永遠性：ライプニッツの批判に抗して」、『北海道大学文学研究科紀要』、第 124 号、所収、1-47 頁。

——、「存在しないものの存在論——スピノザにおける精神の永遠性をめぐる一つの論点——」、スピノザ協会『スピノザーナ』10 号、2009 年、所収。

The status of singular things in Spinoza's *Ethics*: essences and existences

Yukihiko Fujino

According to Spinoza, "particular things are nothing but affections of God's attributes, or modes by which God's attributes are expressed in a certain and determinate way" (E1P25C). As per his definition, *mode* is "the affections of a substance, or that which is in another through which it is also conceived" (E1Def4). This means that he understands things, for example, the human body, as a kind of affection of God, the absolute substance. Then, how can we call things deprived of the status of substance "singular things"? In other words, how can we say that there are singular things?

In Spinoza's metaphysics, existences are conceived in two species; Duration and Eternity. That is concerned with time and space, and this is with necessity in the production from God's nature. To answer the above question, the status of singular things in both species should be examined .

With regard to duration, the essences of things are understood in a fixed manner in which subordinate things, ultimately the simplest bodies, communicate through their own motions. We can see that this essence of things, which Spinoza calls "actual", is not distinguished from the actual (temporal) existence of the singular thing in question.

However, in the species of eternity——though Spinoza says that the formal essences of things are comprehended in God's attributes——cognition about things never extends to their singularities. So, in this case, should we conclude that singular things lose their singularities? My answer is no——the impossibility of cognition of singularities is not necessarily tantamount to the absence of singularity itself. Rather, Spinoza seems to have built a system that places the singularity of things at the base.

「キーワード」
スピノザ、『エチカ』、個物、実体、様態、本質、現実存在